

第4章 番組研究開発の軌跡

——実験番組から研究開発番組へ——

制作部ディレクター

小 町 真 之

はじめに

放送大学の授業番組の中に、制作を放送教育開発センターのディレクターが担当し、制作費の分担上『研究開発番組』と呼ばれているシリーズがある。『研究開発』とはいっても、制作費や制作スケジュールは他の授業番組とまったく変わらないため、ディレクターの個人的努力には限界があり、何らかの組織的な取り組みがないかぎり、研究開発の実をあげることは難しい。この報告書の最初に掲載した『日本人の生活と文化』は、その中では多少とも準備段階で『研究開発』的な検討が加えられ、制作されたものである。

そして近頃では、「放送大学の運営が軌道に乗ってきたから、この研究開発番組の役割は終わった」という声が聞かれる。また、「研究開発番組というレッテルがあろうとなかろうと、研究開発的な新しい試みは、ディレクターであれば誰でも当然しているのだから、予算執行上の制約が多く、意図した番組が作りにくい研究開発など返上したい」という声もある。筆者自身振り返ってみても、担当するすべての研究開発番組を『研究開発』的に作ってきたとはとても言えない。現在の制作条件からいって、そんなことができるわけではない。

では、研究開発番組とはいったい何だったのだろうか。ディレクターたちは講師や研究者と協力しつつ、これまで何を課題にし、どのような番組を制作・研究開発してきたのだろうか。そこで課題としていたことは、その後解消したのだろうか。

研究開発番組の前身、『放送大学（仮称）実験放送番組』がスタートしてから、すでに20年以上が経過した。当時の記憶も薄らぎ、記録も散逸している。当初からこの番組に関心を持ち、現在、制作に携わっているもののひとりとして、関連するドキュメントをできるかぎり集め、これまでの番組の軌跡を整理しておきたいと考えた。以下は、その結果としてのいわば資料集である。

まず、これまでの経緯を簡単にスケッチしておこう。

[実験番組から研究開発番組へ]

イギリスでオープン・ユニヴァーシティがスタートしたのは1971年だが、この前後に日本でも、放送大学という新しい教育方法による大学の発足にむけて、放送をめぐる課題を検討するための具体的な作業が始まっていた。

（正確にはこの動きは、社会教育審議会への「映像放送およびFM放送による教育専門放送のあり方について」の文部省からの諮問（1967.11.）と同審議会からの答申（1969.3.）に始まるというべきだろうし、また文部省がこうした諮問をした背景にはUHFとFMの周波数帯が実用化可能の見通しがついてきたという技術革新があるわけだが、こうした点

は、その後の細かい経緯も含めて、ここでは省略する。)

文部省の委託を受け、放送大学(仮称)実験番組の制作・放送とその教育効果の調査が、テレビはNHK、ラジオは日本短波放送によって、1971(昭和46)年度から開始された。放送による大学教育の可能性や問題点、望ましい番組のあり方を探るのがそのねらいで、NHKの場合、番組の送出は東京・大阪UHF実験局から行われ、調査は文研が担当した。

NHKによる番組の制作・調査は4年間で終了したが、その翌年1975(昭和50)年度には、放送と印刷教材や面接授業などの他のメディアとによる、将来、放送大学で採用する可能性のある学習形態を想定し、その学習効果を実験的に検証する調査が坂元 昂・池田 央らによって実施された。この間にNHKが制作した番組を、千葉テレビ・テレビ神奈川及び日本短波放送の電波で放送しての調査であった。

(続く76・77(昭和51・52)年度には、東北大学と広島大学が文部省から委託を受けて、『放送大学実験番組』(R-T)を地元の民間放送局・東日本放送と中国放送の制作・送出でそれぞれ実施した。現在まで続く『放送利用大学公開講座』は、ここから始まったといっている。)

1978(昭和53年)、放送教育開発センターが発足した。これにともなって、放送大学に関連する実験番組の担当は開発センターに移行、名称を『大学放送教育実験番組』とあらためた。この番組制作はテレビ朝日を中心とする民間放送教育協会(民教協)が引き受け、テレビ放送はテレビ朝日の電波で、ラジオ放送はラジオ関東(のちラジオ日本/ラジオたんぱ)の電波を通じて行われた。この体制での番組の制作・送出は7年間続き、数多くの番組が作られた。

放送教育開発センターの制作棟は1983年に完成し、11月からスタジオの運用が開始された。放送大学の授業開始を目前にした1984(昭和59)年秋からは、このスタジオでの授業番組制作が正式に始まった。この制作は、これに備えて設置されていた放送大学学園および放送教育開発センター双方の制作部がほぼ折半して担当することとなり、開発センターの制作する番組の一部が『研究開発番組』の名のもとに、当初の課題——放送による大学教育の可能性や問題点、望ましい番組のあり方——を引き継いでいるのである。

放送大学の発足前後の数年間、当センター主催の『大学放送教育研究シンポジウム』では、研究開発番組がその主役の『ひとり』であり、さまざまな課題が番組を通して提起された。だが、今はこうしたシンポジウムは開かれなくなった。全般的に見ても、放送大学の運営が軌道に乗り、授業番組の制作が日常化するにつれて、番組のあり方、番組制作のあり方に注意を向けることは、以前よりも少なくなってきたのが実情のように思われる。過去の資料を集めてみよう、と思ったのはそのためである。

この小論では、以上の時間的経過によって、一応、次のように時期を区分する。

1. 放送大学(仮称)実験番組の時期(制作NHK:昭和46~50年度)
2. 大学放送実験番組の時期(制作民教協:昭和53~59年度)
3. シンポジウムと番組の制作研究(昭和56~62年度)*
4. 研究開発番組の時期(制作・放送教育センター:昭和59年度~)

(*3は、時期的には2・4に重なっているが、一応別の柱を立てておく。)

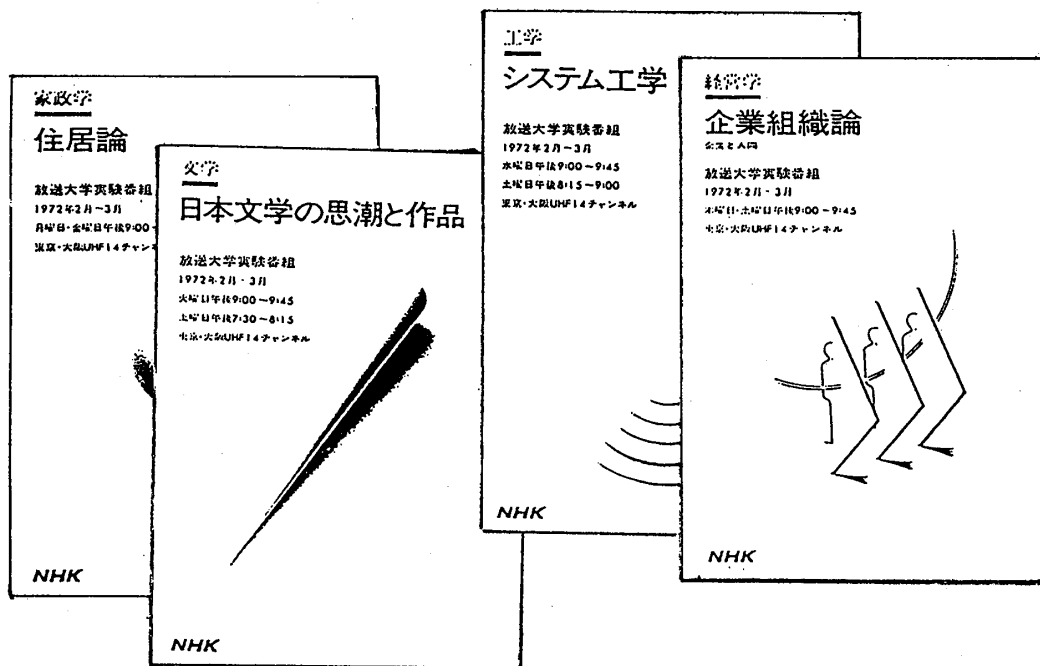
そして、それぞれの時期に実験番組～研究開発番組（おもにTV）が、具体的にどのような課題を担って制作・研究されてきたかを、番組の構成・演出形式（フォーマット）の問題、とりわけ①講師の位置づけ、②講義内容の視覚化（映像化）、③受け手（学習者）への配慮、の3つの点にできるだけ焦点をあてながらあとづけ、整理してみたい。

1. 放送大学（仮称）実験番組（制作NHK：昭和46～50年度）

昭和46年度の後半から、NHKは文部省の委託を受けて放送大学実験番組（テレビ）の制作を開始し、当時東京と大阪で実験局として認められたばかりのUHFの電波を使って実験放送を行い、その教育効果などを調査した。NHKがこうした実験番組を制作することについてはさまざまな議論を呼んだ。しかし、当時すでにNHKは大学レベルの放送番組として、昭和36年度からラジオ番組（当初の30分を除き1時間20分）、40年度からテレビ番組（30分）を『大学通信講座』（41年度から『大学講座』と改称）として制作・放送しているという実績をもっ

〔表－1〕 NHK制作の放送大学（仮称）実験番組

昭和46年度（47. 2. ～ 3. ） 各科目とも1回45分×15回		計15回
家政学『住居論』	吉阪隆正・早稲田大学教授ほか	
文 学『日本文学の思潮と作品』	吉田精一・埼玉大学教授ほか	
工 学『システム工学』	渡辺 茂・東京大学教授ほか	
経営学『企業組織論（企業と人間）』	青沼吉松・慶応義塾大学教授	
昭和47年度（47. 11. ～48. 3. ） 各科目とも1回45分×14回 & 1回60分×12回		計26回
家政学『食品化学』	藤巻正生・東京大学教授	
文 学『日本文学研究～芭蕉・西鶴～』	尾形 侑・東京教育大学助教授 神保五弥・早稲田大学教授	
工 学『生物基礎工学〔I〕』	加藤一郎・早稲田大学教授ほか	
経営学『経営と社会』	中川敬一郎・東京大学教授ほか	
昭和48年度（49. 1. ～ 3. ） 各科目とも1回45分×9回 & 1回90分×5回		計14回
『言語と思考』	滝田文彦・東京大学教授ほか	
『物理学の世界』	中村誠太郎・日本大学教授ほか	
『日本文化史 ～近世・近代～』	西山松之助・東京教育大学教授	
『確率統計論』	森村英典・東京工業大学教授 鷲尾泰俊・慶応技術大学教授	
昭和49年度（50. 1. ～ 3. ） 各科目とも1回60分×8回 & 1回90分×6回		計14回
『日本語の世界』	大野 普・学習院大学教授ほか	
『適正規模論 ～自然・生態・人間～』	菊池 誠・ソニー中央研究所長ほか	
『西欧精神の探求 ～中世～』	堀米庸三・東京大学名誉教授ほか	
『構造と材料の科学』	宮本 博・東京大学教授ほか	



〔写真〕 実験番組の最初のテキスト（森 幸一氏提供）

ていた。NHKがこの委託を受けた経緯はもうひとつははっきりしないが、この時期NHK自身が市民大学を構想していたということもあり、NHKが放送大学番組の制作・送出を担当した場合の問題点を把握する意図もあって、この委託に応じたのではないと思われる。

この時期、当初の文部省からの依頼は「家政学、文学、工学、経営学の4領域に関わるシリーズを」ということだったという。NHKでは特別プロジェクトを作って、実験番組の企画制作に当たった。なお各番組にテキストが作られ、市販された。

ではこのときのディレクターたちは、どのような課題をもって制作に当たったのだろうか。番組編成や調査結果についての報告書と当時のプロジェクト関係者¹⁾の話とから、さきほどの3点に対応する番組の構成・演出上の課題は、つぎのように集約することができる。

- ① 出演講師の人数：番組の多様性と統一性
- ② 講義番組における映像表現：講義の自由な流れと画面の変化
- ③ 学習者の反応を考慮した番組構成

以下、項目ごとに順次説明していこう。

なお、このときの調査は、番組内容の水準、視聴効果、印刷教材の役割、番組利用に関する問題点、などを確かめるために実施したもので、公募した一般モニターと委嘱した専門モニターへの意向調査、印刷教材講読者への葉書アンケートが行われた。報告書のタイトルは、

『放送大学実験番組（テレビ）の効果に関する調査研究の結果について』（昭和46年度）

『昭和47年度 放送大学実験番組に関する調査研究の結果について（要約）』²⁾

『昭和48年度 放送大学（仮称）実験番組（テレビ）の調査研究の結果について』

『昭和49年度 放送大学（仮称）実験番組（テレビ）の調査研究の結果について』

と多少変わってきているが、ここでは〇〇年度報告書と略称する。

a. 出演講師の人数：番組の多様性と統一性

ひとりの講師がシリーズを通して担当すれば、番組の統一性は確保されるが、多くの講師がそれぞれの視点からテーマに迫るといった多様性は失われてしまう。多くの講師が登場できるという点は、教室での講義と異なるテレビならではのメリットだが、多様でさえあればいいと言えないのは、もちろんのことである。理屈のうえでは、講師相互が連絡を密にさえすれば、問題は起こらないはずであるが、現実はその簡単に理屈通りにはいかない。その点を演出によってどうカバーするか、これは講座番組担当者にとっては古くて新しい問題で、『NHK大学講座』での課題でもあった。

一般に講座番組のフォーマットは、シリーズ全体への講師・出演者のかかわり方から、つぎのような4つのタイプに整理することができよう。

I. ひとりの講師がシリーズ全部を担当するタイプ

II. 2～3人の講師がシリーズを分割して担当するタイプ

III. ひとりの講師がシリーズ全部を担当、必要に応じてゲスト講師を登場させるタイプ

番組中でのゲストの比重によって細かい分類も可能だが、記録では判断できない。

IV. 複数の講師（4人以上）がシリーズを分割してそれぞれ別々に担当するタイプ

いうまでもなくこれは、IからIVへと移行するにつれて統一性から多様性へと重心が移っていくという図式である。IIとIVの区別を講師の数が3人か4人かで線を引いたのは、これまでの経験から考えた便宜的なものにすぎない。また、この中間ないし折衷のタイプもあり、聞き役・進行役といった講義以外の役割を持つ人物が登場することもある。こうした分類はたいへん難しい。しかも残された資料には個別番組の出演者の記載がきわめて乏しく、分類の判断に迷うことが多い。ともあれ、番組ごとの出演講師のかかわり方を掴むために、とりあえずこの基準によって、この時期の実験番組をタイプ分けしてみたのが〔表－2〕である。

〔表－2〕 出演講師数によるNHK制作実験番組の4つのタイプ

タイプ I	経営学：企業組織論(46)、 家政学：食品化学(47)、 日本文化史～近世・近代～(48)、
タイプ II	家政学：住居論(46)、 文学：日本文学研究～芭蕉・西鶴～(47)、 経営学：経営と社会(47)、 確率統計論(48)、
タイプ III	工学：システム工学(46)、 言語と思考(48)、 物理科学の世界(48) 日本語の世界(49)、 適正規模論～自然・生態・人間～(49)
タイプ IV	文学：日本文学の思潮と作品(46)、 工学：生物基礎工学(47)、 西欧精神の探究～中世～(49)、 構造と材料の科学(49)

どのような形式を採るかは、テーマと講師とによって左右されはするものの、ディレクター側にまかされていた。しかしこの表で分かるように、各年度とも、4つのタイプがほぼ1つずつ作られているのは興味深い。

各タイプごとに、若干の補足をしておこう。

[タイプⅠ] ひとりの講師の視点でシリーズが貫かれる点で講師の個性が出て面白い反面、ドグマティックになるおそれがある。また、ひとりで10数本のシリーズ全部の準備をするのは容易ではない。こうした点を考慮して『日本文化史～近世・近代～』では、出演する講師を支えるコースチーム作り、内容の検討や映像資料の収集に当たったという。

[タイプⅡ] 2～3人でシリーズを分担するにも、テーマにより、また人によっていろいろなやり方がある。『文学：日本文学研究～芭蕉・西鶴～』の場合は、芭蕉を扱う回は尾形先生、西鶴の回は神保先生というように半々に分けたが、『家政学：住居論』の場合は、日本と欧米の昔の住宅を扱う渡辺先生の2回を除いて、あとは全部吉阪先生が担当された。その点で後者は、タイプⅠにきわめて近いⅡである、と言えよう。

[タイプⅢ] 『言語と思想』や『物理学の世界』の場合、ゲストとして登場する講師はそれぞれの回のテーマについては第1人者であり、メインの講師はシリーズの流れのなかでのその回の位置づけを話すといった役割を受け持ったものと思われる。一方、『工学：システム工学』の場合には、そうしたゲストの登場する回のほかに、現場の第1線で活躍しているゲストが登場する回があり、そのようなゲストは、講師というよりもいわば証人・証言者としての役割を担っていたのではないかと想像される。いずれにしても、メインの講師がシリーズを通して出演することで、多くのゲストによる多様性に統一感を与えていたのだろう。

[タイプⅣ] 『文学：日本文学の思潮と作品』の場合、古代から現代までを扱うため、6人の講師が登場する。担当のディレクターは、文芸評論家として活躍中の若い先生を進行役として毎回登場させることによって、シリーズとしての統一感を保つことを考えた。また『西欧精神の探究～中世～』の場合、講師は14回で9人にのぼるが、その回を担当する講師のレクチャーのあと、全体のメイン講師である堀米先生とサブの木村先生が、担当の講師を交えての話し合いをする、というフォーマットをとっている。そしてこれによって、多数の講師が登場することによる視聴者の混乱を防ごうとしたのである。

さてこうした講師の人数の問題について、報告書はどのように書いているだろうか。番組モニターからの自由記述がこの問題にふれたのは、どうやら48年度だけだったらしい。

『[物理] 単数講師型と複数講師型の比較……

「単数型」支持が26%、「複数型」支持が36%、「どちらでもよい」が36%で、単数型支持の主な理由には「内容、物理観の統一」「講師の人間性が出る」「大学の教室に似ている」など、複数型支持には「変化に富む」「ある程度視聴者の代弁になる」「専門ゲストによる質の向上」といったものが多い。

[文化史] 単数講師と複数講師型の比較……

「単数型」支持30%、「複数型」支持34%、「どちらでも」35%で、単数型支持の主な理由は「講師のまとまった考えが分かる」「親しみが湧く」などで、複数型支持は「内容に深みと広さが出る」「専門的かつ高度になる」「気分が変る」といった理由が多かった。』³⁾

『単数講師か複数講師かについては、一人の講師がずっと講義を続けてほしいという意見とテーマによってそれぞれの専門家による講義を期待するという考え方とに分かれていた。

「一回の番組で講師は一人でよいと思います。」 (女、40代、技術職)

「毎回のゲストの諸先生の講義は興味深く視聴させていただいています。」

(女、40代、一般公務員)』⁴⁾

これだけのデータから言うのはやや危険だが、多数の講師による受講生側の混乱は、48年度にはどうやらなかったらしい。

参考までに、他の年度の報告書が講師にふれている部分も紹介しておこう。

『各科目共通して、最も多くふれられたのは、講師に関する感想であり、関連してゲスト出演者に及ぶものであった。そのことは、この種番組における出演者のウェイトがきわめて重いものであることを示している。…「講座の魅力・迫力を左右するものは講師である」として、講師の人格的魅力をあげるものもあり、講師の語り口のよさや表情、すなわちタレント性を重視するものもある。』⁵⁾

『放送番組では、講師の魅力や個性といったいわゆるタレント性が番組そのものの興味を増したり、失わせたりすることをうかがわせており、番組の展開において占める講師の役割の大きいことを示している。感想は、好評的な感想と批判的な感想にはっきり2分している。

「講師の人柄がブラウン管からはみ出してくるようで、内容同様にへん楽しく視聴できます。」 (男、25才、学生)

「講義の口調が切れ間がなくて、聞き辛いと思いました。」 (女、69才、無職)』⁶⁾

このように講師は番組の成否を左右するが、その選定にディレクターが関与できたのは、このNHKの実験番組の時期だけであった。

b. 講義中心の番組における映像表現：講義の自由な流れと映像

『講師に自由に語らせ、その人間的魅力を発揮させたい』——そう考える一方で、

『教室にはない多様な映像資料を豊かに盛り込み、説得力のある番組にしたい』とも思う。講義中心の番組のディレクターは、いつもこの2つの考えの間をゆれる。講師の人柄やテレビへの慣れ、番組のテーマなどを考慮しながら——。その点では、この時期の実験番組の場合も同じだった。初年度の調査では、特別に委嘱した専門モニターにたいして、放送大学のための番組の性格への期待はつぎの2つの考え方のどちらに近いのか、を尋ねている。

(ア)「教室での講義に代りうる性格がとりわけ重要であるから、講義の重点反復や話のあそびなど、受講者の理解をたすける工夫が大切である。」

(イ)「テレビの特性を活用することがとりわけ重要であるから、教室講義ではできないような映像提示や音声効果など演出上の工夫が大切である。」

つまりテレビ番組の、従来の教室講義の代替・拡大の側面を重視するのか、従来の教室講義とは違った新しい教材提示の側面を重視するのか、をただしたわけである。この回答の結果は、1：3の比率で(イ)が多数であった。回答に添えられた自由記述の一部を紹介しておこう。

『放送大学の学生はノートのとり方などの訓練の不十分なものが多いと思われる。あまり予め、表や図などを用意しすぎると聞きっぱなしになるおそれがある。受講生の特性を考え

ると、むしろ、あまり能率的・合理的な講義でないほうがよいように思われる。」

(43才、男、大学助教授・教育学)

「映像は限られた時間内でフルに活用されるために、視聴している方は考える“間”が必要になってくる。その点、思考できる場というものの工夫がほしい。」

(39才、男、県教委)

「放送で教えるという基本の性格を明確にすべきで、講義をただ電波にのせて送るという姿勢では、放送大学の意味がないと思う。教師の講義を映像にしているという形からの脱皮を考えるべきである。」

(42才、男、市教委指導主事)

「私の考えでは、どちらにも“とりわけ”といって軍配をあげることはない。教室の講義にかわりうる性格はなくてはならず、又、テレビを通じて行なうのであるから、その特性は、十分に生かされるべきだと思う。」

(38才、女、NHK科学番組専門モニター)

「(イ)が重要なことはいうまでもないが、テレビの特性にこだわりすぎて、やたらに写真説明が長かったりする必要はないと思う。また、だからといって、従来の講義調一点ばかりも面白くない。」

(48才、女、放送利用指導員)』⁷⁾

どの意見ももつともで、けっきょくこの問題も、番組のテーマや講師の人柄しだい、といったところに落ち着きそうである。

では、番組制作のうえではどのような工夫をしたらどうか。時間の許すかぎり、映像資料の収集に努力する一方、大きな黒板をスタジオいっばいに用意し、それを使っての講義を中継風にカメラが追いかける番組も作ったという。これは講師の心理的負担を減らし、その人柄を引き出すうえでは有効だった、というのが関係者の評価だった。⁸⁾ 黒板・チョークというふだん使い慣れた「武器」を手に入れているので、講師は話しやすかったに違いない。

ともあれ、映像の面でもさまざまな可能性を追求したことが窺える。

c. 学習者の反応を組み込んだ番組構成

この時期の番組が他の時期と違う一番の特徴は、番組の時間が長いことである。[表-1]で分かるように、最初の年度は45分番組だけだったが、47年度は45分と60分、48年度は45分と90分、49年度には60分と90分というように長時間番組を制作している。言うまでもなく、UHF実験局での放送という条件が、さまざまな長さの番組送出を可能にしたのだった。なぜ、このような長時間の番組を作ったかは、資料や証言でもかならずしもはっきりしないが、長くなった部分でどのような試みをしたかを見ることによって、その意図を推察することができる。

そのひとつが、学習者の反応を番組に組み込む、という試みである。

プロジェクトでは、47年度に『学習効果についての実験的研究』を研究テーマのひとつとした。報告書(要約)は、つぎのように記している。

「…放送がもつ一方方向性をカバーするために、…送り手側と学習者との間になんらかのくふうが配慮されていれば、放送利用学習はいっそう効果的にすすめられ、有意義な学習が成立するのであろうか。」⁹⁾

しかしこのときには、視聴中に起きた疑問をただしながら学習をすすめていく方法として、通

信指導と面接指導を用意しただけで、学習者の発言などを組み込むくふうは、番組自体には見られなかった。それを実現したのは、48年度の実験番組である。

『今回の実験番組では、とかく放送による学習の欠点として指摘されている一方通行の形を破り、送り手側と受け手の相互交流を可能にする演出手法を導入して、講師と質疑応答を行いながら学習を展開した。

〔確率統計論〕ではナマ放送のとき（14回中10回）、特定した学習者の自宅から加入電話で適宜質疑の形で講義に参加してもらった……。

〔言語と思考〕〔物理科学の世界〕〔日本文化史〕では、スタジオに受講生が集合して講師と直接質疑応答を行ったり、あるいはチューターを介して間接的に質疑応答を行いながら学習を進めた。』¹⁰⁾

『日本文化史』の場合はスタジオを2つに仕切り、片方には学生たちがチューターとともにいて、もう片方で行われている西山先生の講義をテレビ受像機を通してモニターするのが番組の前半部分。後半はチューターの司会のもとに質疑をし、講義を終えた西山先生が仕切りの向こうから現れてそれに参加し、回答する——こういったフォーマットだったという。¹¹⁾

このような形の番組について、一般の受講生たちはこれをどう受け止めたのだろうか。報告書によると、この形式は彼らの大多数にはきわめて不評だった。

『「聴講生が邪魔である。質問のために貴重な講義の時間を無駄にしたくない。」

（男、19才以下、工業高専在学）

「時間が余ったために無理矢理感想を聞いたり、質問を強要しているように見受けられる。」

（男、30代、事務職）

「スタジオの生徒は目ざわりに思う。質問は各個人による大差があるため無駄である。」

（女、30代、教職員）』

しかし一方では、少数だがこうした試みに肯定的な意見も寄せられており、それらに共通するのは、『スタジオの学生との連帯感であり、臨場感であった』と報告書は分析している。

『「教室でやっているような状態を作っているので、接近感が感じられた。」

（男、30代、技術職）

「自分の考えと比較できるので、スタジオに学生が参加していることは良いと思います。」

（男、30代、一般公務員）¹²⁾

また『確率統計論』での、電話による特定視聴者の番組参加に対しても、大部分の受講生は否定的だった。これは、分からないとそのつど質問してくる場合が多かったためらしい。

『「質問する時間は別に設けて、講義中は質問しないようにしてほしい。」

（男、30代、技術職）

「途中の質問はあまり役には立ちません。その週の問題になる所を電話で集計いただき、次回簡単に解説していただいた方がよく分かります。」

（男、40代、管理職）¹³⁾

このように、番組に視聴者（の代表）を入れたときには概して不評だったが、これを入れなかった49年度になるとそうした形式を求める声が出てくるから面白い。

『「テレビではどうしても一方的になってしまうので、ある程度の回を重ねたら、質問に答

える日のようなものを設けて、先生方と生徒の話し合いなどをするようにしたらどうでしょうか。」
(女、21才、学生)

「大学での講義と異なり、視聴者の反応が直接ないので、講義の進み方が単調となり、わかりづらいところがある。この点に関しては、スタジオに何人かの視聴者を入れて、その人の反応を見ながら講義を進めていったら改良されるのではないかと思う。」

(男、23才、大学院生)』¹⁴⁾

しかしこの49年度には、プロジェクトの課題は前項で取り上げた問題——複数の講師をどう処理するか——に移っていたらしい。

このように、NHKによる実験番組は4年間にわたってさまざまな実験を試み、昭和49年度で終了した。50年度には、この期間に作られた実験番組を使っての受け手調査が、文部省の委託を受けて日本短波放送を窓口として行われた。¹⁵⁾ この調査には、テレビ番組として『日本語の世界』『構造と材料の科学』『適正規模論』の3シリーズが調査対象に選ばれ、関東地区の民法UHF局を通じて再放送された。¹⁶⁾ しかしこの調査の目的は、放送大学の教育に必要な教材や学習指導体制の整備についての基礎資料を得るため『放送大学で将来採用する可能性のある学習形態を想定し、放送その他各種の情報媒体を総合的に活用してどこまで学習効果を高められるかを、年間を通じて実験的に検証』することにあり、番組の演出形式などについてはほとんど扱っていない。したがって、この調査についてはこれ以上ふれないことにする。

また、昭和51年度に始まる東北大学・広島大学などと地元民間放送局との協力による『放送大学実験番組』は、大学公開講座につながる番組なので、やはり取り上げないでおく。

2. 大学放送教育実験番組（制作：民教協、昭和53～59年度）

放送大学設立への準備機関として、昭和53年に放送教育開発センターが発足、これとともに従来の実験番組の制作・放送にかかわる仕事は、従来の文部省から開発センターへと移管された。そして、この実験番組は『大学放送教育実験番組』と名を変え、テレビ朝日を中心とする民間放送教育協会（以下、民教協と略称する）がその制作・放送を引き受けることとなった。民教協制作の実験番組がNHKのそれと大きく違うのは、次の4点であろう。

- ①企画が制作スタッフの手を離れたこと
- ②年間制作シリーズ数が増加し、番組が多様になったこと
- ③時間が1本45分、1シリーズ15本に統一されたこと
- ④印刷教材が厚くなり、現在のものに近づいたこと

NHKの実験番組では45分よりも長時間の番組が制作されたが、それについてははっきりした評価がないままなぜ45分にもどったか、という点は明らかではない（といっても、筆者自身の感覚では45分ぐらいが適当ではないかと思っているのだが）。あるいは、テレビ朝日という民間放送局の電波を通して放送するという条件が、これに関係しているのかも知れない。

53年移行の7年間に制作されたテレビ番組は、右の表のとおり81シリーズ、合計1215本にのぼる。¹⁷⁾

この間の実験番組では、いったいどんなことが課題になったのであろうか。各年度の制作が終わった段階でまとめられたと思われる実施報告書が、昭和55・56年度の2冊だけ手もとにあ

【表－3】 民教協制作実験番組
年度別シリーズ数

年 度	前 期	後 期	合 計
53	-	6	6
54	6	6	12
55	7	7	14
56	7	7	14
57	7	7	14
58	7	7	14
59	7	-	7

る。これは、年度当初どのような基本方針で制作に当たったか、実施上どのような効果があがり問題点が残ったかを記した「総論」と、①構成・形式、②演出、③講師などについて記した「各論」、および「各制作担当者の報告」から構成されており、どれも関係者の思いをかなり率直に述べたいへん興味深い内容である。全部の年度の報告書が見当たらず、年度を追っての変化がつかめないのは残念だが、定期的に中間に当たるこの2冊によって、当時の「課題」を明らかにしたい。

a. 制作の基本方針と番組形式

民教協の場合、講座番組の経験者がそれほど多いとは思われないし、スタッフも、テレビ朝日、テレビ朝日映像、ビデオパックニッポンなどに分かれていたためでもあろう、総括プロデューサーが年度ごとに制作の基本方針を示し、全スタッフに徹底させることにしていた。

〔55年度〕基本方針は前年度の「制作上のアンケート」をもとにしたつぎの3点であった。

『(1) 視覚素材を多くして、受講生が理解しやすくする。

(2) 講師との打合せ時間を出来る限り多くとり、1回の講義の量を調節し、消化不良にならないようにする。

(3) 平板になりがちな講座番組を魅力あるものにする為に講師の個性をいかにいかすかを考える。』¹⁸⁾

その結果、(1)についてはかなりの進歩が見られ、(2)も過去2年の経験から制作者の説明・要望を講師が受け入れ、時間配分を考慮するようになったし、(3)についても講師の個性を生かした従来にない演出を試みるなど、苦心のあとがうかがわれた、と報告されている。講師についてはこのあとにきわめて厳しい意見を述べているが、それについてはのちにふれる。

〔56年度〕基本的な制作方針として全スタッフに要望したのは、つぎの3点である。

『(1)…過去2年の調査の結果、受講生の学歴は予想以上に高く(略)易しくすることだけが大学講座として適当かどうか疑問である。……現在の実験番組段階では、いろいろの試みが必要であろうと思われるので、今年度は従来よりレベルをやや高めに設定して講義をして頂き、構成・演出もそれに対応するようにした。

(2) 講義が流暢であり、構成展開がまとまっているということと、受講生が理解しやすいということは必ずしも一致するわけではない。

よく理解させる構成・演出とはどういうものであるか研究する。

(3) 講座番組を魅力あるものにするには講師の個性をいかに引き出すかにある。話術にしる動作にしる、人柄にしる、講師の魅力と思われる点をとらえてそれを押し出す構成・演出を考える。』¹⁹⁾

その結果の反省点としては、(1)講師がいづれも初めてだったため、昨年までとの比較が分かりにくく、当初の基本方針が達成できたかどうか不明。(2)結果を判定するのはきわめて難しいが、

各講座ともそれぞれ工夫をこらして理解させることに全力をあげた。しかしなかには流暢のあまり、受け止める側で考える間がまったくないのでは、と思われるものもあった。(3)各科目とも、それなりの研究がみられたが、一部の番組では、講師の強烈な個性に引きづられて言うままになったため、魅力にするどころか、マイナスになったものもあった。——大略、このように報告されている。

それでは、民教協制作の実験番組はどのような演出形式をとっていたのだろうか。55年度報告書では、構成・形式をつぎの5つのタイプに分けている。²⁰⁾

- ①講師のストレート・トーク：…『日本古代史』『海洋の科学』
- ②講師とゲスト：……………『近代日本経済史』『近代西洋経済史』『工学的人間学』
『音楽史と音楽論』『運動と体力』『ドイツの言語文化』
- ③講師と聴講生：……………『確率と統計』『住居の科学』
- ④講師とティータイムの聞き手：『服装の美意識』『児童心理』
- ⑤講師、ゲストと聴講生：…………『生活とかたち』『運動と体力』

このうち、③⑤の聴講生と④のティータイムの聞き手については、説明が必要だろう。聴講生は番組によって多少違うが、視聴者の代表として講師の質問に答えるとか、講師に質問するなどの役割をもち、多くの場合、タレントやアナウンサーが起用された。ティータイムは、番組の中間に設けるいわば息抜きの時間で、文字どおりお茶が出て雑談をすることもあるし、主題に関係のある囲み記事的なコーナーの場合もある。筆者の推測だが、このティータイムは、45分ぶっ続けの講義を聞かされるのはたいへんだろうという受講生への配慮から、実験番組の初期に制作方針として打ち出されたものではなかったか。この時期の番組をそれほど多く見たわけではないが、メインの講義とティータイムのエピソードの提示とが硬軟の対照よろしきを得て見事な効果を挙げている場合もあったが、ややおざなりにティータイムが処理されている場合もあった、という印象を筆者はもっている。

そうした点があったためだろうか、56年度報告書によると『昨年のアンケートの結果、ティータイムよりもその時間だけ講義の密度を濃くして欲しいとの希望が多かった』ので、この年度は講師のストレート・トークを主体にする番組を多く、ティータイムをとったのは『地球像の変遷』だけだった。アシスタント役の聴講生を置いたのも『文化人類学』『人口・食糧・資源』と『イギリスの言語文化』の3科目に過ぎなかったという。しかし、だからといって講義の密度がそれだけ濃くなったというと、必ずしもそうはならなかった。

『第一の理由は、講義の内容を、質的に充実させるより、量的にふやした傾向が強いからである。1項目減らして、じっくり説明して欲しいという希望に対して、数分ふえたのだから1項目ふやせる——それが密度を濃くすると受けとめられたようだ。この結果、早口で淡々とした講義が多くなった。』

報告書は苦い思いをこめて、こう分析している。²¹⁾

講師の問題、聴講生の問題は、それぞれ項をあらためてふれることにしよう。

b. 講師とディレクター

民教協の報告書には、実験番組制作の過程で講師が如何にブレーキになったかがきわめて率

直に述べられている。その表現はともかくとして、その内容は現在のディレクターが胸中ひそかに抱いている講師への希望・感想とあまり変わらないように思われる。

担当番組が決まり講師の名前が分かると、ディレクターはなるべく早く、その講師の個性や発想の特徴などをつかんで番組づくりに備えようとする。

『ただ、』と報告書は言う。長くなるが原文をなるべく（改行以外は）そのまま引用しよう。

『どの講座も、スタート当初の2～3回は、いずれも講師の特徴が充分つかめず、戸惑いが感じられた。15回の講義を終りまで引っぱっていくには、最初の1～2回が大きなポイントになる。最初が余りに難しく、又とっつきにくい場合、（受講生は学習を）つい止めてしまう場合が多い。そういう意味で、第1回から講師の個性がいかされ癖を充分のみこんで構成演出することが必要である。従って、企画決定から、第1回の録画までの間に従来よりももっと頻繁に接触し、人間的関係を深めていくことが必要であり、それには企画決定の時期を出来る限り早めることが望まれる。……』²²⁾

しかし、現在は1シリーズ当たりの出演講師の数が増加する傾向にあり、講師ひとりひとりの個性や癖のみこんで演出することは、この当時よりも難しくなっているのではないかとさえ思われる。さて、つづいて報告書は、講師の番組出演に対する態度・姿勢に言及する。

『…過去3年間の実験番組制作を通して、……番組として成否をきめる最大の鍵は、出演講師にあるということは間違いない。必要と思われる素材を100%準備したとしても、講師の話し方や、カメラへの適応性などによって、活かされないばかりか、マイナスにさえなってしまう。時間と費用をかけて調査し、取材した素材を、生かすも、殺すも、一にかかって講師にあるのである。現在の機構では、講師の選定は、制作者の全く知らない所で決定される。従って電波媒体への適性など殆んど考慮されていないと思われる。どれ程高名な大学者でも、ぼそぼそしゃべったり、早口であったり、発声が不明瞭であったりすると、テレビ・ラジオでは決して名声に価する評価はうけないものである。大統領や首相の選択が、テレビ討論会でできまるといわれる時代である。政策だけでなく、容貌や話術が重要な要素になっている。放送による大学講座を担当する講師は、容貌はともかく話術は当然研究すべきである。然し学者は研究実績だけがすべてだと考えている講師が多い。放送講座は研究発表が目的ではなく、受講生（学生）の教育が目的である。従って、如何に理解させるかを考えない人は、講師として不適格だといわなければならない。』²³⁾

この指摘には、おそらく現在のほとんどのディレクターが共感をおぼえるのではあるまいか。もちろん、当時でも現在でも、すばらしい講師との出会いを多くのディレクターが経験していることは、言うまでもないのだが。

56年度報告書でも、講師とディレクターとの関係が問題になっている。

『早口の講師にはディレクターはしつこい位、その点を注意する。講師は、「よくわかっている」というが、本番がはじまると忽ちピッチがあがってしまう。こういう癖は、簡単には治らない。従って、しゃべり続けられないような方法を考えなければならない。いくつかの区切りをつけて受講生が考え、理解できる時間をつくらなくてはならない。その為には制作者は特定の構成・形式・演出を強制しなければならない場合もある。これが教室での講義と放送による講義の根本的な違いである。然し、現在迄の所、講師に遠慮して講師の言うま、

にした結果、超特急講義になって、周囲の景色は何一つ覚えていないというものもある。停車駅をつくり、話し相手があれば楽しい実りのある旅にできたのではないかと悔やまれる。(中略) 逆に、効果的とも思われない技法を、講師に押しつけた為、動作に気をとられて講義が不安定になった例もあった。いずれも講師と制作者がじっくり検討すれば避けられることである。(中略)「かけ足講義」というと、概して講義のテーマ(範囲)が広すぎて、15回を通して、又1回1回の内容が多すぎて消化不良の傾向が強い。45分間でどれだけ話せるかの計算ができていない。経験のあるプロデューサー、ディレクターから構成段階で「こんなに項目が多くては、かけ足の説明になってしまうから、2～3項目削った方がいいのではないか」と意見を出しても、「このテーマ・タイトルならどうしてもこれだけは必要だ」ということで、講師に押しきられる場合が多い。結果は100%悪くなっている。』²⁴⁾

この指摘から10年以上経過しているが、サイの河原の石積み同様、事態は一向に変わらず、あきらめて講師になにも注文しなくなったディレクターが増える傾向にある。報告書でも指摘していることだが、これを改善するには講師とディレクターとが事前の打ち合わせを十分にしないが、講師の多忙をはじめ、それができる体制にはほど遠いのが現状である。

『制作を開始して、どの講師もいわれることは「最初の話では、大学での講義をテレビですらだけで極めて簡単だということで引受けたが、こんなに手間がかかるとは……」という苦情である。その苦情をきき、なだめるのはすべて制作者である。テキスト執筆に関する苦情まで、制作者は聞かなければならない。』²⁵⁾

これは55年度報告書の記載だが、翌56年度報告書の講師の項は、次のように結ばれている。

『全科目、講師の先生方の熱意には感謝に耐えない。然し、“多忙”ということが制作上最大のネックであることは過去3年と全く同じである。毎年同じ報告になるが、講師委嘱の段階で、テレビ制作にはどの程度時間をさかなければならないかを充分説明しておいて頂きたい。』²⁶⁾

c. 視覚化・映像化をめぐる問題

報告書では、主として〔演出について〕の項でこの問題を扱っている。ここで取り上げている点のひとつは、『図表の作り方・提示の仕方』である。一般番組の手法と講座番組の手法とが混在し、演出的に徹底していないことを指摘して、55年度報告書はこう述べている。

『図表は講師から受けとった原稿を忠実に書いてある。これは確かに講座式的であるが、その図表が果してテレビ的であるのかどうか、又、数字の羅列である図表を、テレビ的な別の図表に書きかえることは出来ないのかどうか、そういう研究が不足しているのではないかと思われる。図表を写す時間について、今年のアンケートでも、短すぎるという苦情が多い。講師の顔をうつすより、図表をもっと長く写してくれという希望が多い。これは過去2年間いわれつづけてきたが、未だに同じことをいわれている。一般番組では確かに1カットを1分も2分もうつすのには抵抗があるだろう。然し講座番組は、受講生がその図表を理解できるか、或いは筆写し終るまで写すのが当然である。ディレクターは、自分が受講生になったつもりで、時間を計算しなければならない。』²⁷⁾

これは、われわれ講座番組のディレクターにとっては卒業したことのはずだが、やはりときど

きはこの「初心」に帰ることが大切だろう。

さて、もうひとつの問題は『ロケーション』である。55年度報告書は、現地取材をすればより明確になると思われるのがかなりあったのに、『制作費と時間の都合で、全般的にロケーションが少ないのが残念』だとしながらも、いくつかロケを活用した番組があるなかで、とくに講師自ら現地で解説を入れた「音楽史と音楽論」「工学的人間学」が大いに効果を上げたことは評価されるべきだ、としている。²⁸⁾

ロケは少しずつ増え、56年度には新しい試みとして、「文化人類学」でオール・ロケーションによる番組を1回作成している。『民族学博物館内で、実物を見せながら、45分の講義をしたわけであるが、カメラの台数や照明設備など、物理的制約のためディレクターの意図通りの番組にはならなかった。然しパターン化しつゝあるスタジオ番組に新風を吹き込んだことは間違いない。』このほか「日本の生活文化史」は、従来撮影ができなかった寺院や旧跡で数多くのロケーションを実施した。『これは大学講座の意義が次第に認識されている証拠であり、こうした積極的な素材作成の意欲によって講座の質は大いに向上していくに違いない。』²⁹⁾

画面づくりでの3つ目の問題はセットである。56年度報告書は、担当ディレクターたちに向けて、次のようなアドバイスをしている。

『例えば、フィルムやVTR素材を説明する場合、講師は講師の机からモニターを見て説明する。映像は素材の絵や説明は声だけである。もしこの時、講師がモニターにもたれかかって受講生に話しかけている絵があれば、変化もでるし、より親愛感が出るかもしれない。歴史年表のようにぎっしり書きこまれたものは、巨大なパネルにして文字を大きくし、美術パトロンから吊し講師が長い棒で説明してもよい。映像的にも、又文字を明瞭にうつせる点でも効果があがるのではないだろうか。ホリズントを大黒板と見たて、利用することも出来るだろう。これは私見で、実際にやると不都合な点が生じるかもしれない。然し、こうした実験精神、冒険的、野心的手法も、実験放送段階ではどしどしやってみるべきであろう。』³⁰⁾

実験段階だけでなく現在でも、こうした気持ちこそが番組を改善していく原動力だといえよう。

d. 受け手への配慮

民教協による実験番組の特徴のひとつは、前にもふれたように聴講生の起用とティー・タイムの設定にある。そしてその共通点は、受け手への配慮ではないかと思われる。以下、個別番組担当者の記述から、関連する部分をいくつか抜き出してみよう。

55年度制作の「近代西洋経済史」は3人の先生が担当したが、そのひとり鳥羽先生の場合は『学部生を使い、宿題を出してあらかじめ調べて来るという形式で、学生はその道の権威ある先生の研究室を訪ね質問して宿題をこなす』³¹⁾ という設定だった。おそらく、受講生と同質の学生を登場させることによって、番組に受講生との接点をつくらうとしたのであろう。

同じ年の「海洋の科学」では、『中頃に tea time を設け、主任講師と担当講師が座談することによって、その時間のテーマの理解を側面から助けるよう工夫した。しかし、tea time というリラックスした感じが出ず、本編の続きというような感じで終る場合もあって』tea time としての面白さが十分発揮できなかった、と担当者は反省している。³²⁾

この反省から、同じ主任講師による翌年の「地球像の変遷」では、番組の中間に「奈須先生

のエピソード・タイム」というコーナーを設け、『対話相手に女性の聞き役を用意し、くつろいだ雰囲気を出すよう心掛けた。内容は奈須先生の長い研究活動の中で思い出に残っている話を番組のテーマに関係なく語っていただくというもので、その内容と語り口のソフトさでスタッフ間ではなかなか好評だった』という。³³⁾

56年度制作「人口・食糧・資源Ⅰ～人口・資源～」では、講師にとっては後半の講義のスタンバイになり、受講者にたいしては前半の講義をまとめるひとときと息ぬきを、というねらいから、中間に1～2分のインターミッションを設けた。これは、『スチール写真などをバックにして学者の論文や人口会議の宣言の一節を字幕で紹介』、サウンドは音楽のみというコーナーである。また、『データを多用せざるを得ないこの種の講義の硬質な雰囲気をやわらげる効果』もねらって、やはり中ほどに5～6分時間を取り、女性の聞き手による（講義の内容や印象を受けての）質疑にたいし答えるコーナーをつくった。この2つは、『長時間、ひとりカメラに向かって話す（講師の）負担を、幾分でも軽減』³⁴⁾ することが第一のねらいではあるが、番組の流れに変化をつけることによって、長時間、講義を聞く受講生の負担を軽減しようと意識していることも確かである。

しかし、こうした試みがかならずしもすべて成功したとは言えないようで、聴講生の起用にについては、総括プロデューサーは次のように指摘している。

『……聴講生の存在と使い方に問題が残った。聴講生は殆んどその科目は初めてというものを起用しているが、講義の進行を中断する方が多く、受講生（視聴者）の理解を助ける役目より、無意味な飾り物になっているケースが多い。もし聴講生を起用する場合は、適材であるか否かをよく検討すべきであろう。安易にタレントを配して、形式的な質問をさせることが、講義をわかりやすくすることだと考えるのは余りにも安直で無責任である。』³⁵⁾

この55年度の問題点は、翌年にも持ち越されたようだ。

『……聴講生の扱い方・人選に疑問が残った。出した以上、何らかの形で講義に参加させなければというので、無駄な質問や形式的なつなぎ役をつとめることとなり、流れが分断されてマイナス面が目立った。聴講生を起用する場合、いつ、どのように参加させるか、更に研究する必要がある。』³⁶⁾

どうやら、受講生（視聴者）の代表であるはずの聴講生が、代表としての機能を果たしていないところに問題があるように思われる。ある種の番組では代表機能を持ちうるが、他の番組では代表機能を持たせるところに、つまり聴講生として参加させるところに無理があるのかもしれない。視聴者の代表としてではなく別の役割をもっている場合、それを聴講生と呼ぶのには少し違和感がある。ここでの問題はそうしたところに起因しているのではなかろうか。

筆者は、放送大学の授業番組について、ここで言う『聴講生』を含め、番組の進行にかかわる講師以外の登場人物を『聞き手』と総称し、その機能・役割を分析したことがあるし、³⁷⁾ 番組に『聞き手』を登場させた経験も何度かある。確かにこの『聴講生』の使い方は難しく、その質問しだいではぶち壊しになるが、起用の仕方によっては、講師の負担を軽減し、番組に変化をつけ、受講生との接点を作る、というメリットもある。その意味で、この実験番組での『聴講生』の試みから現在の我々が学ぶ点は、けっして少なくない。

e. 番組記録の意味

民教協による実験番組の実施報告書は、前にも述べたように、7年のうち、55・56の2年度分しか目にすることができなかった。しかし残された資料だけでも、当時のプロデューサーやディレクターたちがどんな課題をもち、それにどう取り組んだか、どう反省したか、などがなまなましく伝わってくる。彼らの歯がゆい思いが現在も解決されずに続いていることが、この報告書を読めば分かる。長くなるので承知で引用したのはそのためである。

この報告書から我々が学ぶもうひとつの点は、『記録することの大切さ』であろう。制作した番組は、VTRカセットを見ればどんなものかは分かるが、15本全部を見るのは容易ではないし、とりわけ、つくったディレクターの意図や思い＝番組の裏側にあるものを、VTRから掴むのは難しい。経験や想いを文字として残すこと、この報告書はそのこと重要性を我々示唆している。

3. シンポジウムと番組の制作研究（昭和56～62年度）

放送教育開発センターでは、昭和56年11月、前年ようやくできあがった現在の管理棟を会場に「第1回放送教育研究シンポジウム」を開催した。

以後、放送大学が発足し軌道に乗るまでの時期に、当センターが主催したシンポジウムにおいて実験番組や研究開発番組をめぐってどのような報告・検討が行われたのか。またシンポジウム以外に、どのような番組の制作・研究が行われたのか。そのテーマは何だったのか。ここでは残された記録をもとに、こうした点を年度ごとに紹介することにしたい。

とは言うものの、当センター発足後10年の足取りをまとめた『10年のあゆみ』には、年表以外に大学放送教育研究シンポジウムの内容についての記載がほとんどない。とくに、第2回については記録が見当たらない。筆者は、このころ赤坂・都市センターホールでのシンポジウムに参加した記録があるが、それが第2回のものであったのかどうか、さだかではない。とりあえず、他の資料で補いながらシンポジウムの流れをたどっておこう〔表-4〕。

なお、当センター制作部は58年4月に設置され、同年11月のテレビ・スタジオ運行開始とともに番組制作の試行が始まった。

a. 昭和56年度（第1回大学放送教育研究シンポジウム）

この「第1回シンポジウム」は、『大学教育における放送利用の現状と問題点を明らかにし、今後の改善を図る』というねらいのもとに、「大学教育における放送利用」「大学公開講座における放送利用」という2つのシンポジウムと「放送を利用した大学教育における学習方法の開発」というパネル討議を行った。

このうち第1シンポジウムでは、民教協制作の実験番組についての受講生へのアンケート調査の結果が、『放送教育開発センターにおける大学放送教育実施番組の効果』と題して当センター客員教授・池田 央東京工業大学教授から報告された。この調査は毎年実施されていたもので、報告のほとんどは受講生の年齢・学歴別に見た受講動機や視聴頻度、講義内容への予備知識の有無、通信指導・面接指導への要望など。『実験番組の効果』という題にもかかわらず、番組には「講義について」という項でふれているものの、その効果には言及していない。

〔表－４〕 大学放送教育研究シンポジウムの流れ

日 時	名 称	主 題 ・ 番 組 等
S56. 11. 19.	第 1 回大学放送教育 研究シンポジウム	「大学教育における放送利用」 「大学公開講座における放送利用」
57. 11. 18 ～19	第 2 回大学放送教育 研究シンポジウム	
58. 12. 13 ～14	第 3 回大学放送教育 研究シンポジウム	「映像教材の 6 タイプ」
59 年秋	〔実験番組制作終了。放送大学授業番組（研究開発番組）制作開始〕	
59. 12. 14 ～15	第 4 回大学放送教育 研究シンポジウム	
60. 11. 13 ～14	第 5 回大学放送教育 研究シンポジウム	「教育社会学」
61. 11. 5 ～ 6	第 1 回大学放送教育 研究シンポジウム	「文化人類学」
62. 12. 17 ～18	第 7 回大学放送教育 研究シンポジウム	「学校教育」

なお、このときの調査対象だった実験番組は、54年度前期・後期と55年度前期、つまり前節で紹介した番組をその一部に含んでいる。以下、発言記録を項目ごとに整理して紹介しておく。

〔講師の話し方〕

『もっと改善してもらいたい希望として、「原稿を読むのではなく話しかけるような態度で」という要望が強いように思う。それから、次に「ユーモアを交える」、専門的な内容の深いような科目については、「ゆっくり話してほしい」「やさしい言葉を使う」等の要望が多いように思う。』

〔番組内容への希望〕

『「テキストのポイントを詳しく説明してほしい」というのが3分の1で、「テキストの内容をもっと発展させた解説が欲しい」というのが約3分の1、「テキストの内容を具体化して話してほしい」というのが23%で、その3点に大部分の希望が集中している。

この点を考えると、よい放送の条件として、導入部で最初のねらいを説明し、おわりにまとめをし、質問コーナーを設けてほしいという希望が特に多いように思う。それから、練習を必要とする科目、例えば語学勉強とか数学の統計などでは、応用問題も出してほしいという希望がある。』

〔「ティータイム」〕（注：番組中に設けられた休憩コーナーや囲み記事的コーナー）

『放送番組として興味をそそったり、息ぬきに必要と思い入れていることが多いのだとおもうが、それに対する希望はあまり強くはなかった。』

[テレビ番組の編成制作への注文]

『…主な所をみると、理系の番組では実物や模型を取り入れてほしい、図とか写真、スライドを多くしてほしいという要望があるが、板書やよく用いるドラマ化したものなどは相対的にみてあまり評判がよくなく、ドラマ化は一番人気がないように思う。』³⁸⁾

番組に関する発言の部分は以上である。最後の項目の「よく用いるドラマ化したもの」という個所は、当時実際にはドラマはほとんど使われていなかったことから見て、選択肢としてあったドラマへの回答が少なかったのを混同して発言したか、ないし記録の際に何らかのミスがあったか、のどちらかではないかと思われる。

b. 昭和57年度

この節の最初にも記したように、第2回シンポジウムに関する記録は、目下のところ見当たらない。そこで、このシンポジウムで研究結果が発表されたかどうか不明ではあるが、初期のMME研究ノートの中からは、当時、番組についてどのような研究が行われていたか、記録を抜き書きすることにしよう。

[受け手調査] 初期の番組研究は、まず受け手の反応を収集することから始まった。阿部美哉は2年後に発行された『MME研究ノート21』にこう書いている。

『放送によって伝達される映像教材および音声教材の制作は、大学教員の専門領域とは大きく掛け離れた世界の業務である。番組制作にかんしては、ディレクターが長年の経験を持っているとしても、第一の与件（注・開講科目の内容は大学レベルを維持するよう義務づけられているという点）のもとでの制作という経験は持っていない。学者・研究者は、専門分野の研究成果を出版する経験は積んでいるが、印刷教材によって学生を教育するという経験は、大部分の主任講師にとって新しいものに違いない。インターアクティブな教授・学習経験は、伝統的な大学においては、……日常的に起こる。しかし遠隔高等教育においては、……日常的な学習の在り方は独習型となる。そこで日常的にもインターアクティブな学習経験の持てる教材の開発がきわめて重要な課題となってくる。

……放送教育開発センターでは、上記のような問題意識にたって、まず昭和57年度に、放送大学実験講座番組の幾つかについて「学習グループ」を組織して、学習の実態を克明に調査した。たとえば「知能と創造性」については田中正吾教授が、「動物の行動」については寺脇信夫教授が、また「宗教理論と宗教史」については阿部（注：阿部美哉教授）が担当して、毎回の視聴ノートを作成してもらい、学習行動と番組にたいする学習者の忌憚ない反応を収集することができた。さらに、その時までにはできあがっていた全ての放送大学実験講座番組のテキストを、広島大学の喜多村和之教授その他の方々の協力をえて、モニターに読んでもらい、自由に読後の感想を書いてもらった。印刷教材にたいする利用者の要望と批判を収集し、ある程度類型化することもできたのである。』³⁹⁾

c. 昭和58年度（第3回シンポジウム～番組の6タイプ～）

昭和58年度の第3回シンポジウムは、完成間もない放送教育開発センター制作棟ホールで行われた。この年の4月に放送大学が開学し、その開設準備機関としてのセンターの仕事が注

目を集めているさなかの開催であった。シンポジウムについては後でふれるとして、まずこの年の研究について見ていくことにしよう。

〔内容分析と送り手調査〕 「大学放送教育番組の改善に関する調査研究」をテーマに6人の研究班を組織し、57年度制作のうちの5シリーズを選んで、番組の視聴・分析・評価を通して番組改善の方策を探ろうとした。メンバーのひとり、寺脇信夫によると、そのアプローチには2つの方向があったという。

『ひとつは、各実験番組（いずれも45分番組が15本で成り立っている）を、それぞれ大学教授2名、受講生5名、ディレクター2名の計9名の方々に試聴していただき、予め用意したチェック・リストに照らして内容を分析し、評価するようお願いし、番組の内容や番組制作の上で、いかなる問題が存在するかを指摘していただこうと考えている。もうひとつは、各実験番組の制作に関係した主任講師と担当ディレクターの中から、番組制作上の改善点をダイレクトに引き出したいと考えている。

こうして、最終的には、教育効果のあがる良い大学放送教育番組を制作するための制作システムの改善を提案しようとするものである。』⁴⁰⁾

〔受け手調査〕 前年度に作成された「知能と創造性」シリーズを東京工業大学坂元 昂教授が聖心女子大学での授業に利用するとともに、その受講者である4年生12人を対象に次のような手続きで調査を実施した。⁴¹⁾

1. あらかじめテキストを各自に一冊ずつ与え、予習させる。
2. 大学の講義時間に番組を毎回一本ないし二本視聴させる。
3. 番組視聴の前後にあらかじめ準備しておいた課題への回答を求める。

与える課題は毎回異なり、その多くはグループ回答を求めるものであった。

4. 全番組視聴後、再度二人に一冊あてテキストを配布し、番組・テキストに関する意見を細大漏らさず記入させ、回収する。

結果については省略するが、この調査がねらったのはおもに次の点であった。

- a. 放送学習技能＝番組視聴の前・中・後に受講者がどのような学習行動をとったか
- b. 通信指導問題＝通信指導の課題として提示する内容と番組／テキストとの関係
- c. 視聴分析＝番組の各シーンが役に立つかどうか、面白いかどうかの反応調査

〔制作体制の研究〕 イギリス公開大学がとっているような、コースチームによる制作の可能性についての検討が、当時、番組の研究開発での大きなテーマであった。

（蛇足ながら、イギリスでのコースチームについて付言しておく。公開大学では、何をどのように教えるかを検討するため、教学スタッフ、教育工学専門家、BBCの制作スタッフの3グループから構成されるチームを組織し、これをコースチームと呼ぶ。コースチームは、教授細目の決定、テレビ番組・ラジオ番組・印刷教材などの制作に責任をもつ。

公開大学副学長だったW. ペイリーは『公開大学は今後ますます世界中に広まってくるであろうが、コースチームの考え方が、公開大学の概念の中で最も重要で影響力の大きな概念になることは確かであろう。』と著書のなかで述べている。⁴³⁾

この年、後述の同一テーマによる6タイプの試作番組を制作したディレクターのひとり、内田安昭は、『制作システムのテストを兼ねたコースチーム』という副題の論文で、この試作番

組がどのような意図と体制のもとに制作されたか、を報告している。⁴³⁾

『コースチームという言葉や考え方は、開発センターの研究会などでは、しばしば論じられその必要性が叫ばれていた。……イギリスのオープン・ユニバーシティのコースチームのことを学習したり、テキストや参考図書と学習センターと放送との相互補完作用を論じたりしたのであった。……番組を主体にしたコースチームの実験を58年度はやってみよう、という声が当然出てくるような、当時の研究会のなりゆきであった。』

結局この時は、コースという言葉が選択進路とまぎらわしいなどの理由で、コースチームという名称は使わなかった。しかし、つぎのメンバーによる実質的なコースチームで制作・研究が行われた。

柳 川 啓 一	東京大学教授	出演・テキスト執筆
坂 元 昂	東京工業大学教授	研究担当
阿 部 美 哉	放送教育開発センター教授	〃
中 原 健二郎	〃	制作部長 プロデューサー
野 沢 卓 式	〃	ディレクター 演出担当
内 田 安 昭	〃	〃

ここで、研究と制作との役割分担がある点が注目される。研究担当者は、視聴者の反応を調べる方法として質問紙法・アナライザー方式を選び、番組完成後に東京工業大学と東京女子大学で調査を実施した。

【演出形式の研究】 上記コースチームの制作・演出担当者が中心になって、柳川啓一東大教授が担当する「宗教史と宗教理論」のうち、日本人の来世観をテーマにした「天国と地獄（死後の世界）」を次の6タイプで制作した。

- 1台カメラによる教室での講義の中継（カメラ＝1人の学生の視点で）
- 3台カメラによる教室での講義の中継（黒板のアップや他の学生の反応なども）
- スタジオでの講座番組形式の講義（パターンなどを適宜インサート）
- 現場からの中継形式による講義（鎌倉の杉本寺・円応寺を講師が訪問して）
- ドキュメンタリーVTRを講師が説明
- ドキュメンタリーVTR・ナレーター久米 明（俳優）

このような番組を制作したねらいは、企画書によると

『番組の構成・演出の手法は数多くあるにもかかわらず、通常は1パターンしか制作されないもので、他と比較したり、最適の手法はどれかを論じたりすることが出来にくい、従って、同一講義を6つの形式で制作してみて、どの形式が講師にとっても受講生にとっても、最も望ましいかを検討する』

とある。「天国と地獄」の講義（番組）内容は、6タイプとも同じで、死後の裁判・天国と地獄観の成立・六道輪廻・十王思想・八大地獄・地藏菩薩の救いなどのキーワードが共通して語られている。制作に当たっては、同じ内容の番組をいくつも見せられる被験者が退屈しないよう配慮し、素材の重複をさけ、また教室での講義＝aとbは合わせて一本ともいえる形に編集した。各番組の長さは15～25分程度となっている。

コースチームのメンバー、阿部美哉は、この実験全体を次のように総括している。

『これらの実験の結果、主任講師の講義を映像化する番組作りは、極めて教育効果が低く、映像特性を生かした番組作りが望ましいこと、そのためにはディレクターの番組制作上の専門知識とリーダーシップが欠かせないが、ディレクターと講義を支える学者集団との学問に関する共通理解が求められること、印刷教材は、学習の中心となるばかりでなく、それ自体が学習者と対話を進めるようなものであることが求められていること、学習者の多くは、人生経験に裏付けられ、強い動機を持っていて、要求水準はかなり高いこと、映像番組と印刷教材には明確に別の内容と機能が求められていることなどが明らかになった。』⁴⁴⁾

しかしこの総括のうち、「講義を映像化する番組作りは、極めて教育効果が低い」という部分は、やや結論を急ぎすぎたように思われ、筆者としては、にわかには賛成し難い。確かにデータを見ると、講師中心の映像の番組に比べ、現場中継やドキュメンタリー手法による番組の方が、多くの学生たちの興味を引き学習への意欲をかきたててはいるが、この結論を導くためにはさらにいくつかのデータがほしいと思う。

なお、制作研究としては、この6タイプの試作番組による研究のほかに、実験番組と関連させて実施した「オーディション番組」の制作がある。これは、テレビ5科目、ラジオ4科目の規模であった。ふたたび内田の論文から引用する。

『実験番組のオーディションは、58年の春から夏にかけて、中原健二郎教授兼制作部長の指揮のもとに、民教協で制作された。直接制作を担当したのは、ビデオパック、朝日映像、ラジオたんぱ等である。

オーディション番組の内容を(…)ごく簡単に紹介しておくと、テレビ5番組はそれぞれに演出・構成上のねらいを持ち、例えば、吉田夏彦先生の「記号と情報」では、番組導入部をどうするか、のねらいに沿って、いくつかのドラマタイズしたコントの試作を行っているし、伊藤正男先生の「脳と行動」では、極めて難解な専門語・内容をどう簡明にするか、のねらいで、コンピューター・アニメ的な、動きのある図解等を試みている。他にも、現場中継の工夫、一人語りの場面設定の工夫、コーヒー・ブレイクの工夫、などが制作されていて、これから制作に入る番組の出演講師やディレクター、構成者たちの参考に供しようとしたのであった。』⁴⁵⁾

放送大学発足当初の番組には、途中にコーヒー・ブレイクがあるものが多いなど、このときの試みを実行に移したものがかなり見られた。

そして、このような問題意識・番組・調査データをふまえた形で、第3回大学放送教育研究シンポジウムが開催された。放送大学の開講が一年少し後に迫っている時期であった。このときの模様は『MME研究ノート 6』「映像表現の多様性——シンポジウムの記録——」⁴⁶⁾に記載されている。番組に関するセッションは次の3つである。

1) 映像表現の多様性と伝達機能

6タイプの映像表現のセグメントをもとに、あらかじめ実施された視聴学生の反応調査の結果を交えて、制作意図・教育効果と演出形成との関連などを討議した。また、会場の参加者に学生調査と同じ調査を行い、あとでその結果を比較することも試みた。

このセッションの司会をした中野照海 I C U 教授は、討議のねらいを『(1)学問の伝達と表現の形式、(2)番組制作の体制、(3)放送大学システムでの番組の役割』と述べている。こ

の全部が討議で深められたとは必ずしもいえないが、実験番組の課題としてきたのはまさにこの点であったといえよう。ゲストの今野 勉氏は『アカデミズムとニューメディアとのぶつかり合い』とこのセッションの印象を総括している。

2) 映像と印刷教材の組み合わせに関する比較研究——心理学の場合——

放送教育開発センター制作・放送の『知能と創造性』、カリフォルニアのコースト・コミュニティ・カレッジ制作・PBS ネットで全米に放送の“The Growing Years”のそれぞれのシリーズから遺伝と環境を扱った番組を選んで視聴し、資料として提出された印刷教材をふまえながら、ゲストの木下恵介氏を中心に、教材としての表現について突っ込んだ議論を行った。ここで木下氏から指摘されたのは、学習情報を1画面に盛り込みすぎて視点が曖昧になるという問題、およびショットのサイズと伝達すべき意味との関係の問題であった。

3) 映像と印刷教材の組み合わせに関する比較研究——生化学の場合——

イギリス公開大学のテレビ番組と大阪大学（蛋白質研究所）の放送公開講座の番組を視聴し、両者の目的・対象・手法等について比較するとともに、教材の制作にあたった教官・ディレクターからの報告をもとに討議を行った。議論は、蛋白質の構造・機能を伝えるためのモデルの作成、番組に盛り込まれた情報内容の多さ、テレビは動機づけ以上き役割を担えるのか、印刷教材と放送教材との役割分担、等々の問題をめぐって行われた。

筆者もこのシンポジウムを傍聴したが、このシンポジウムが開かれた時期は、放送大学の開講を一年後に控えていたこともあって、放送教材に対する関心がもっとも高まっていたように思われ、報告にも議論にも熱気があってなかなか興味深かった。とくに、第1セッションで6タイプの番組について会場で参加者へのアンケートを実施し、その集計結果を報告したが、これが学生たちの反応とは逆に講義中心の番組が相対的に高い評価を受けていたこと、第2セッションで木下恵介氏が、教材における映像のあり方について本質をついたきわめて的確な指摘をされていたこと、などが印象に残っている。

d. 昭和59年度

「放送大学の開学にあたって」というテーマで開催されたこの年のシンポジウムについては、翌年発行されたMME研究ノート18に詳細な記録が載っている。このなかでは、第1セッション『学習指導の方法をめぐって』および第2セッション『語学番組の課題』が、放送大学の実験番組を扱ったものであった。

[第1セッション『学習指導の方法をめぐって』]

『放送という、基本的に単一の方向性しか持たないメディアを用いる遠隔教育に対して…教師が学習者の達成状況を把握し、それによって教授方法に改良を加え、さらに積極的に学習者を励ます……そういった一種の“フィードバック・システム”を何らかの形で…導入できないだろうか……』

このような問題関心をもとに、上記研究班では、実験番組『青少年文化』『人間の生物学』の視聴者のなかから各50人前後の特別モニターを委嘱、毎回放送内容に関する質問を郵送し、その回答を葉書で返送する、という形での調査を実施した。この調査の結果についての分析は、

シンポジウムの時にはまだ完全に終わってはいなかったが、特別モニターの平均回答数は15回に対して11.3回だった。このような葉書による質問を毎回続けたことが、学習の動機づけになり、学習を継続させる力になったのではないか、今後、ニュー・メディアの発達によってパーソナル・コミュニケーションの機会が可能になるが、そうした場合、コンピューターが欠かせないだろう、というのが研究班の結論的な意見であった。⁴⁷⁾

〔第2セッション『語学番組の課題』〕

『入学試験によって選抜され、語学力に関してかなり均質な集団である既成大学の学生に比べ、放送大学で学ぶ学習者集団の語学力は、極めて広い分散を示すことが想定される。そういった学習者に対し、放送による大学教育がどの程度のレベルのどのような教材をどんな形で提供すべきが重要な問題となる。……』

このような視点から、ドイツ語、英語、フランス語の担当講師とディレクターが番組を制作しながら考えていること、悩んでいることを報告し、議論した。⁴⁸⁾

2つのセッションとも長時間だったため、発言は多岐にわたっている。要約は難しいのでこの程度にとどめ、この年度に報告された他の研究を見ておきたい。まず、この年5月に発行されたMME研究ノート9の記載をもとに、第1セッション関連の研究の経緯を簡単に紹介しておくことにしよう。

〔大学放送教育番組の改善研究〕 58年度に〔内容分析と送り手調査〕として紹介したものの続編で、実験番組「動物の行動」「基礎化学Ⅰ」「知能と創造性」各シリーズの中間報告。

「動物の行動」シリーズは9人の研究協力者（大学教授2、受講生5、ディレクター2）に視聴を依頼し、アンケートと自由記述による番組評価をしてもらった。番組内容が①理解しやすいか、②興味深いか、③学習に役立ったか、④学習意欲を高めたか、を5段階で尋ねたアンケートはこの時点ではまだ集計が終わっておらず、報告者の寺脇信夫は、自由記述を7項目に整理したうえで、そのまとめと提言という形で番組改善に関する教訓を集約している。⁴⁹⁾

『……講座内容の編成には、関係者一同、手間と時間をかけることがだいじだということである。……特に3人とか4人といった、複数の講師で講座を担当していく場合には、……キーワードというか、講義内容全体を通して一貫する共通の考え方といったものを、キチンと打ち合わせておくことが、大切である。』

『「番組の内容・構成・展開」に関する意見や感想を読んで感じたことであるが、良いできばえの番組であればある程、視聴後、受講生の頭には、次から次へと、発展学習のテーマが浮かんで来るものらしいことが、はっきりとわかったことである。…ぜひ、そういう良質の番組があってほしいものだと思う。…「見て、聞いて、わかった。おしまい。」というのでは、大学放送教育番組としては、甚だ物足りない…。ぜひとも…発展学習のテーマが、次から次へと浮かんで来るような番組であってほしい。』

『今まで、あまりよく知らなかったことで、大変、良く理解できた場合にも、わかったという喜びと同時に、大変な感動をも呼び起こすものようである。…やはり、番組であるからには、ぜひとも、感動を呼ぶような番組であってほしい…。』

『この種の番組では、科学的実験や具体的な科学の手順をふんだ観察シーンを伴った番組構成、番組展開のものの方が、とても、評判がよかった。実験→結果→法則といった提示法、

これが、番組内容のわかりやすさ、理解しやすさに役立っているにちがいない。』

『「番組内容」に関する注文として、次のような意見が、多数出されていた。つまり、放送は、一方通行であるが、番組の視聴中、あるいは、視聴後、受講生の頭に浮かんだ疑問や質問に答えるような手だてを考えてほしいというのである。このような願いは、学習者としては、当然すぎる要求である。学習講座番組である以上、何らかの方法を開発することが望ましいと考える。……』

(主任講師と担当ディレクターのインタビューを記録した他の2シリーズは省略する。)

[制作体制の研究] 前年度のシンポジウムで取り上げた『宗教理論と宗教史』を、59年度にシリーズとして制作するに当たって、どのような企画の体制＝コースチームを作って検討をすすめたかを『MME研究ノート 21』(1985. 8.)が特集している。このプロジェクトは、先の6タイプの番組制作の実験をふまえ『こうした先行研究の結果を活用することを試み……昭和57年度制作の番組およびテキストの安易な改定を行うのではなく、新しい遠隔教材制作の理念に立って、構想を全く一新して、制作に取り組むこととした』という。このシリーズの主任講師のひとり、阿部美哉の報告は次のように続いている。⁵⁰⁾

『テキスト、テレビ番組、通信指導および評価試験をひとつのパッケージとして、それぞれが印刷教材、映像および音声教材、遠隔高等教育における教育と学習のフィードバックの機会として、おのおののメディアの特徴を生かして或程度の独立性を備えるとともに、各教材が補完しあうような構成をとるように工夫することとした。このパッケージの企画制作にあたっては、コース・チームの手法を採択することとし、チームの人選においては、二本の大学および放送局の実態に即して、東京大学の宗教学宗教史学講座の最近の卒業生で他の大学で教員になっている者、大学院生ならびに学部学生、…上記番組をも担当していただいたディレクター、放送教育開発センターで教育工学を専門とする助教授、国立歴史民俗学博物館で民俗資料の収集にあたっている映像資料の専門家、もとNHKのアナウンサーであった家庭夫人、新聞社で整理部門に勤務するサラリーマンとその夫人および大学生の令息、および放送大学の他の番組にアシスタントとして出演した他の大学の大学院生を含むものとし、参加をお願いして全員の快諾をえた。すなわち知識の与え手側の専門家ばかりでなく、想定された受講者のプロファイルに合わせて、受講者的な性格を備えと考えられたタイプの代表を含めたのである。』

[ゼミナール形式番組の開発] このコースチームの大きな課題は、教材の制作にある。ここでは、どのようにして印刷教材の作成に取り組んだかは省略し、コースチームによる新しい形式の番組の開発について、島田裕巳の報告で紹介しよう。⁵¹⁾

『…テレビの番組については、今までの大学講座にはない形式を考えることにした。その際のポイントはいくつかあるが、まず第一にテレビ番組として45分の視聴に耐え、継続して学習しようという意欲を掻き立てるものでなければならない。第二には、主任講師やその他出演者の緊張感を取り除き、作りやすく、見易い番組を目指さなければならない。第三に、学習者の参加意識を高める番組でなければならない。孤独な学習者に対する配慮である。そういった三つの点を考慮して決定されたのが、演習形式、ゼミナール形式の番組である。毎回、レギュラーで出演する学生を数人選び、その人達には学習者の代表としての役割をお願いし、

質問や討論に参加してもらおう。時には、レポーターとしての仕事を依頼する場合もある。進行役としては本職のアナウンサーを司会者に使う。コース・チームのメンバーには、担当の章の番組には必ず出演して、報告やフィルム、VTRの解説等をしてもらう。また、各回の内容にふさわしい専門の研究者をゲストとして招き、映像等を使いながら話をしてもらい、討論にも加わってもらう。基本的には、そういったプランで進めることになった。（＊出演者一略）

こういった形式のヒントになったのはいくつかのテレビ番組である。例えば、多人数による討論という形式についてはNHK教育テレビの『YOU』、レポーターを活用することに関しては『ウィーク・エンダー』、メインになる講師の他に本職の司会者を使うことに関しては『アフター・ヌーン・ショー』等が参考になっている。ともかく従来の大学講座番組を批判的にとらえ、それを乗り越える道を探ろうとするものである。』

こうして、コースチームによる教材制作の試みは、ケース・スタディとして『一応の成果を収めた』。しかし、この試みの一般化については、阿部美哉は次のように書いている。⁵²⁾

『…その他の科目についても、このやりかたが有効であるか、否か、如何とも言えない。独創性の一段と強い学問分野や、ディレクターがそう簡単に内容についていくことの難しい尖端的な自然科学の諸分野などでは、チームの議論がはたして可能かどうかとも疑わしい。しかしかなり多くの分野において、ディレクターや一種の受講生代表を含めたグループでの、独習者を念頭に置いたブレン・ストーミングは、分かりやすい教材を作り上げるのに有効だと考えられるし、研究者にとっても、十分な知的刺激を受ける機会になりうる……。』

シリーズ全部の教材を、評価の問題まで含めてコースチームで検討し制作するというこの手法は、残念ながら、その後現在にいたるまでとられてはいない。これが成功した理由としては、開発センターの研究者・ディレクターの協力がうまくいったこと、放送大学授業番組の制作が日常化するまえだったので制作スケジュールに余裕があったこと、などの点があげられよう。放送大学が手探りで方法を模索する時期が過ぎてしまったいま、新しい試みをする余地はますます狭められているように思われる。ここに見られたような試みの必要性は、まだまだあるような気がするのだが。

e. 昭和60年度〔第5回シンポジウム～「教育社会学」～〕

この年の4月、放送大学が初めて学生を受け入れ、授業番組の放送が正式に始まった。秋のシンポジウムには、放送されている番組を素材にしてセッションが行われた。

〔メディア間の役割分担の研究〕 放送大学が開講したこの年度には、放送はまだ『1年生』相当分しかされておらず、今後登場する科目をテレビ・ラジオどちらのメディアに割りふるのがいいか、その場合印刷教材はテレビとラジオで内容・構成を変えるべきかどうか、といった点が問題になっていた。

そこで、『教育社会学』のなかの「学校の近代化と外国教育の受容」というテレビ番組の内容をラジオで作ったらどうなるか、という問題意識のもとにコースチームを組織し、ラジオの試作番組とT-Rそれぞれの印刷教材を作り、調査を実施した。そして11月の公開シンポジウムでは、第3セッションで報告と討論を行った。⁵³⁾

これについてのコースチームのメンバーは次のとおり。

新井邦男	上越教育大学教授（主任講師）	出演・原テキスト執筆
深谷昌志	放送大学教授	調査担当
阿部美哉	放送教育開発センター研究開発部長	チーム・リーダー
赤堀正宜	〃	ディレクター
島田裕巳	〃	助手
		ラジオ番組制作・調査
		印刷教材制作

テレビ番組はすでに制作されたものそのままとし、ラジオ番組だけを新たに作ったが、両者の差がはっきり出ていなかったためか、あるいはシンポジウムで時間の関係から番組全部を視聴しなかったためか、T-Rの違いはほとんど議論にならなかった。パネラーのひとり深谷昌志の次の発言が、T-Rの違いについて唯一のまとまった意見だった。

『テレビではなるだけ印象深く情緒に訴えておきながら、学問的な体系は印刷教材だと。ラジオの場合は、論理みたいなものはラジオでやっておいて、印刷教材の中では情緒に訴えるような形の問いかけが必要なんだろうというのは、いまなんとなく思っているところなわけです。今度のもそういうような仮説がある程度答えが出たのじゃないか……』⁵⁴⁾

f. 昭和61年度（第1回国際シンポジウム～「文化人類学」～）

この年には、第1回の大学放送教育国際シンポジウムが開かれたため、第6回の研究シンポジウムはそれに吸収された（らしい）。このシンポジウムに向けて、どのようなテーマでどのような番組を制作・研究するかを検討した結果、放送大学の祖父江教授の協力を得て、「文化人類学」を素材にしてラジオ・テレビの教材開発をテーマとすることになった。⁵⁵⁾

『メディア間の役割分担の研究』放送教育開発センターでは、前年度から『テレビ・ラジオと印刷教材の複合利用に関する研究』プロジェクトをスタートさせた。これは、より教育効果しようというものである。これには、授業科目をテレビ向き・ラジオ向きに振り分ける手掛かりを得たいという関係者の要望もあったように思われる。前年度の「教育社会学」に続いて、今年度は主任講師・祖父江孝男教授の「文化人類学」のなかから『文化変化と文化変容』を選び、すでに制作・放送されている番組とは全く異なるテレビ番組（ドキュメンタリー形式）とラジオ番組（録音構成形式）とを新たに制作し、それに付随した印刷副教材をメディア別に試作した。

コースチームのメンバーは次のとおり。

祖父江孝男	放送大学教授（主任講師）	出演・原テキスト執筆
岡崎友典	〃 助教授	調査担当
橋本健	〃 学園・ディレクター	現行番組制作
水谷次男	放送大学教育振興会編集本部長	
阿部美哉	放送教育開発センター研究開発部長	チーム・リーダー
杉依孝	〃	制作部次長
赤堀正宜	〃	ディレクター
小町真之	〃	〃
島田裕巳	〃	助手
		テレビ番組制作
		ラジオ番組制作
		印刷教材制作

〔テレビ番組〕 テレビがねらったのは、講師が講義をしない番組であった。日本で文化変化がもっとも顕著に見られるのは高度成長期の前後だという講師の発言を手掛かりに、高度成長期以前を記録した映像を探し、昭和35年のNHK制作のドキュメンタリー『山の分校の記録』にたどり着いた。そして、その舞台である栗山村土呂部の現在とフィルムの映像とを対比することによって、文化変化を具体的に示すことをねらった。祖父江先生には、現地を実地調査することによって、文化人類学の特徴であるフィールド・ワークを実際に示していただくことにした。

しかし個々の事実を並列的に並べるだけで、その事実のもつ「意味」を伝えることが十分でなかった点で、番組としては失敗だと批判された。BBCなどの番組と違って、放送大学の授業番組は45分ある。事実を提示して学習の動機づけをすればそれでいい、というわけにはいかない。講師の講義なしに個々の事実から「文化変化」という概念にどう到達させるか、その部分をどう処理するか。コースチームでの討論の場面を入れるなどのくふうが欲しかった、というのが筆者の感想である。いずれにせよ、映像化さえすればいいのではなく、どう映像化するかが問題だということをはっきりさせた点は、この番組の功績といえよう。

〔ラジオ番組〕 ラジオ番組は単調でつまらない、とよく言われる。そこで、テレビは具体・ラジオは抽象という固定観念を崩し、ラジオの可能性を示すことを、制作のねらいのひとつとした。ラジオがつまらない原因のひとつは、講師の話が抽象的な説明に終始し、実感や経験から遠い点にあると思われる。いっぽう、今日の若者たちがラジオに惹かれるのは、ラジオというメディアのもつパーソナル性にあるといえよう。そこで、文化変化に関する講師の個人的体験をできるだけ話してもらい、それを手掛かりに番組を構成した。学生に関心の深い身近な話題、反対に学生の知らないような以外な話題を盛り込むことにも努力した。また、一般のラジオの授業番組では、テキスト内容の棒読みに終始することが多いと聞いていたので、話以外の音の要素（音楽・効果音・引用文の朗読など）をなるべく取り入れて、変化を持たせることに留意した。今回の制作に当たっては、講師とディレクターの間で何回も意見の交換ができた点で、コースチームによる番組制作のよさだったと思う。

テレビ・ラジオそれぞれの特性にあわせて授業科目の振り分けをしたい、そのための手掛かりをつかみたいという関係者のねがいはこの研究でも果たされず、テレビ向きの科目・ラジオ向きの科目といっても番組の作り方しだいでもかなり違うとになりそうだ、という印象を残してこのシンポジウムを終わった。

g. 昭和62年度（第7回シンポジウム～「学校教育」～）

このシンポジウムでは、1. 学習者主体の教材作りへの接近、2. 多メディア環境における教育と学習（メディア・ミックス）、3. 番組分析と視聴行動の研究（タクソノミー）の3つのセッションが行われた。ここでは、放送大学の授業番組を取り上げた第1、第3セッションを紹介しよう。

〔第1セッション・学習者主体の教材作りへの接近〕⁵⁶⁾

シンポジウムで授業番組を取りあげる場合、何を取りあげるかは、研究開発番組の主任講師のうちシンポジウムに協力していただけるのは誰か、によってきまる。さかのばれば、そ

の点を考慮してどの番組を研究開発番組にするかをきめる、ということになる。この年には、次年度制作の「学校教育」の主任講師、深谷教授にご協力頂けることになり、その試作番組の制作を兼ねてということから番組がきまり、学習者を巻き込む番組を作ろうということで制作の方向がきまったものである。これまで紹介したように当センターでは、かねてからテレビ・ラジオ・印刷教材それぞれの役割分担についての研究を、コースチームを作って実施しており、今回もその枠組みのなかで作業を進めた。

『放送利用の大学教育においては、学習者の側の学習への主体的取り組みが特に重要である。そこで、放送教材及び印刷教材の制作に当たっては、学習者の主体的な学習を喚起し、またそれを支援するための工夫が重要になってくる。放送大学専門科目の「学校教育」では、現在、「学習者主体の教材作り」という観点から改定版の制作研究を行っている。本セッションでは、この研究結果、特に試作教材、「第3章 学校行事」を取り上げ、上記の課題について考える。』

今回のコースチームのメンバーは次のとおり。

深 谷 昌 志	放送大学教授	出演・シノプシス執筆
阿 部 美 哉	放送教育開発センター研究開発部長	リーダー
小 町 真 之	〃	ディレクター
島 田 裕 巳	〃	助手
天 笠 茂	千葉大学助教授	〃
明 石 要 一	〃	調査担当
岡 崎 友 典	放送大学助教授	〃
岩 永 雅 也	放送教育開発センター助手	〃

[番組制作のポイント] 『E. デールは「番組というのは、学習者を巻き込み、参加させるような機会をもっているか、それとも学習者・生徒たちをショー・見世物の単なる観客にしているか、が評価のポイントである」と書いているが、これまで知識を一方向的に流し込むばかりで、学生を巻き込むような番組を作る機会が少なかった。番組中の課題を入れることは、阿部先生ほかのアイディアでできたことだが、視聴後に課題にこたえるAタイプと、視聴中に課題にこたえるBタイプの2つを盛り込んだ番組を作ってみた。視聴後にこたえる課題を入れると、番組の最初に前回の課題一回答へのフィードバックが必要で、番組の起承転結という点からはしっかりこないところがある。そういう部分の処理は、今後検討する必要がある。視聴中の課題については、どんな課題を出すか、何回出すか、回答の時間は一応2分間としたがどの位が適当か、またその2分間を映像のうえでどう処理するか、こうした問題が残っている。』⁵⁷⁾

[アンケート調査の結果] 『(回答者は448名、4グループ。放送大学の学生：58.7%、他大学の学生：34%、小・中学校教員：17名、主婦専業：20名。男女比は36:64) 課題コーナーの設定：約6割(*67%)が好意的。課題コーナーの回数・2回：ちょうどよいが8割強(*同じ)。課題コーナーの時間・2分：ちょうどよい43%(*64%) 短過ぎる55%(*23%)、実際はかなり書いている時間が長ければもっと書いたかどうかは不明。質問内容：適切が74%(*70%)、挿入個所：適切が86%(*87%)、課題コーナーへの評価 ①自分の考

えを確かめるのに：とても＋かなり＝66%が役立った。②積極的に勉強できる：とても＋かなり＝45%が役立った。③ちょっとした気分転換：とても＋かなり＝45%が役に立った。学習しながら自己確認していく方法としてよかったのではないか。番組の前後の課題コーナーも受講生から好意的に受け止められている。（＊会場での調査結果）』⁵⁸⁾

この結果に基づき翌年度制作の研究開発番組「学校教育」では、番組の中間に2回以内の課題コーナーと最後に宿題としての課題を設けることを原則とした。試作・調査を踏まえて制作できた点で、手続的にはこれがもっとも研究開発の名にふさわしい番組だったと思う。

〔第3セッション・番組分析と視聴行動の研究〕

開発センターの研究プロジェクトのひとつ、『放送教育番組のタクソノミーの研究開発』の研究報告で、プロジェクトのメンバーのなかから3人が発表した。⁵⁹⁾

藤 田 恵 璽 放送教育開発センター教授・プロジェクトリーダー

伊 藤 秀 子 〃 助教授・アイカメラによる調査担当

福 田 滋 〃 助教授・番組制作者の立場から

『放送教育において情報の送り手はどのように番組を構成して放送しているか。また、情報の受け手はどのようにそれを視聴して学習しているか。これらを検討することがわれわれの課題である。このセッションでは形態的特性の計測による番組分析、アイカメラによる視聴行動分析、再生テストによる視聴学習測定等の試みを紹介し、その方法論を中心として討議する。また、制作者の立場からみた問題点及び研究成果の適用可能性について考察する。』

藤田)『番組への関心度と学習量との関連を調べるため、関心度の高い場面では入力される情報量も多く再生率も高いという仮説を立てて予備的な調査を実施した結果、関心度の高い場面では再生率も高いことが分かった。また番組を分析する枠組として、本のページに対応するものとして「ショット」をとり、番組がどのくらいの長さのショット・何枚で構成されているかを調べている。特徴的な番組でのショットの分布を手掛かりに分析を進めていきたい。』

伊藤)『番組のどこをみて何を学んだかをアイカメラと視聴後調査によってとらえている。眼球運動について分かったこと：①講師は情報源なので顔、とくに目や口に視線が集中する。②テロップなどの文字情報は、提示の直後にそちらに目が行く。③映像の動きと眼球運動の関係では「映像＋音声による提示」と「映像だけの提示」とはほぼ同じパターンを示す。④静止画像・グラフでの眼球運動は音声情報＝説明の有無で異なる。以上の結果からの「番組制作への示唆」は、効率的な情報伝達の場合と学習者に考えさせる場合とで、音声を控えるなど映像・音声の提示の仕方を変えることを検討してもいいのではないか、という点である。』

福田)『ディレクターとして講義を映像化するときの基本的な問題は、①何をどう表現するか、②その表現がなぜ必要か、③その表現はどういう意味があるのか、この3点を十分納得して作っていかないといけない。「日本文化史」『連歌師』で取材した奉納連歌を講師の解説なしと解説つきとを比較提示し、講師とディレクターの協力関係、大学の講義の映像化という課題の意味を整理しておく。』

この節では、昭和53年から62年にかけて、放送教育開発センターで放送大学の授業番組をめぐってどのような研究が行われてきたかを、主にその発表の場であるシンポジウムに焦点を

当ててみてきた。そのほとんどがケース・スタディだと言っていいだろう。そこでは、講師・研究者とディレクターとが協力して、制作体制・番組内容・番組形式・受け手の反応などについて制作と研究を進めてきた。そこでの経験や知見のうち、現在の番組制作に役立つと思われるものをできるだけ拾いあげようつとめたつもりだが、データ不足や個人的な知識・関心のかたよりなどもあって思うに任せなかった。これまでの努力を生かし切れなかった点は、お許し頂きたい。

おわりに

これまでの記録を振り返ってあらためて感じるのは、映像、ないしその制作の過程を、文字で記録することの難しさである。しかし、文字は、映像とは違ったものを記録として残してくれる。これまでの記録からもお分かりのように、高等教育レベルの放送教材・ビデオ教材をめぐる問題は多方面にわたっており、ディレクターは新しい番組を担当するたびに、新しい課題に直面するのが実情である。しかも、そうした制作上の努力が当事者周辺にだけ記憶され、それもやがて時とともに風化してしまうのは、残念だしもったいない。そうした努力を記録し、集積することを通して、はじめて、高等教育で利用する映像教材のあり方を検討する手がかりがつかめるのではないだろうか。その意味で、今後とも文字による映像記録の方法を検討し、それを通して、高等教育にかかわる映像表現の問題を考えていきたいと思う。

この第7回大学放送教育研究シンポジウム以後、放送大学の授業番組を素材にしたシンポジウムは行われていない。シンポジウムに番組が取りあげられていた時期には、「研究開発番組」は、その番組が『右代表』としていわば表舞台に立ち、それ以外の番組はいろいろな手法の開発を試みてはいても、それを発表することがほとんどなかった。ひとつには、調査をし数字を並べないと研究にはならないという意識があるため、番組作りに追われるディレクターには「研究開発」が敬遠された、ということもその理由にある。しかし、昭和63年以降も『研究開発番組』という名の番組の制作は続いており、それが形式的にもせよ『研究開発』の名のもとでの制作である以上、何らかの形で制作の記録を残しておきたいと思っている。今となっては民教協のようなものは無理ではあるが——。このあとにそれを書く予定であったが残念ながら時間が無い。他日を期したい。

〔注〕

- 1) 当初のプロジェクト・リーダー小島良彦氏（現東京家政大学教授）ほか。なお、このメンバーのなかには、当センター制作部の福田 滋、NHKエデュケーショナルの森 幸一各ディレクターのように、現在も放送大学の番組制作に関わっている人もいる。
- 2) この47年度だけは要約版しか見つからず、完全な版があったかどうか不明である。
- 3) 日本放送協会『昭和48年度報告書』 pp. 39-40, (1974.4.)
- 4) 同上 p. 54
- 5) 『昭和46年度報告書』 p. 91, (一般モニター自由記述欄)
- 6) 『昭和49年度報告書』 p. 51,
- 7) 『昭和46年度報告書』 p. 70-72, (専門モニター調査)
- 8) 47年度・工学など。小島良彦氏の直話による。

- 9) 『昭和47年度報告書』 p. 35,
- 10) 『昭和48年度報告書』 p. 52-53,
- 11) 担当した福田 滋ディレクターの直話による。
- 12) 『昭和48年度報告書』 pp. 52-53,
- 13) 同上 p. 52,
- 14) 『昭和48年度報告書』 p. 50
- 15) 日本短波放送『昭和50年度 放送大学の教育放送に関する調査研究報告書』
- 16) これらの科目を選定するに当たって、調査チームでは次の3つの選択基準を設けた。
 - ①異なった学習過程の実験に適する多様な番組であること
 - ②予想される実験対象者の興味と関心に適合できるものであること
 - ③教材の提示について、A T RまたはV T Rの特質を生かしたものであること
 なおラジオ番組では、日本短波放送制作の『社会と統計』『近代社会の展開』『現代の人間観』が調査対象に選ばれた。(『昭和50年度報告書』 p. 17,)
- 17) 民間放送教育協会『民教協20年の歩み』昭和62年 により算出。
- 18) 同『昭和55年度大学放送教育実験番組実施報告書』(『昭和55年度報告書』と略称) p. 5
- 19) 同『昭和56年度大学放送教育実験番組実施報告書』(『昭和56年度報告書』と略称) p. 8
- 20) 『昭和55年度報告書』 p. 8
- 21) 『昭和56年度報告書』 p. 13
- 22) 『昭和55年度報告書』 pp. 5-6
- 23) 同上 pp. 6-7
- 24) 『昭和56年度報告書』 pp. 10-11
- 25) 『昭和55年度報告書』 p. 10
- 26) 『昭和56年度報告書』 p. 16
- 27) 『昭和55年度報告書』 pp. 9-10
- 28) 同上 p. 10
- 29) 『昭和56年度報告書』 p. 15
- 30) 同上 pp. 14-15
- 31) 『昭和55年度報告書』 p. 21
- 32) 『昭和56年度報告書』 p. 20
- 33) 『昭和55年度報告書』 p. 32
- 34) 同上 pp. 25-26
- 35) 『昭和55年度報告書』 p. 5
- 36) 『昭和56年度報告書』 p. 14
- 37) 小町「放送大学の授業番組における『聞き手』の役割」『放送教育開発センター研究紀要第4号』
- 38) 池田 央「放送教育開発センターにおける大学放送教育実験番組の効果」『第1回大学放送教育研究シンポジウム実施報告書』 p. 23, 1982. 2.
- 39) 阿部美哉「コース・チームによる教材制作の試み」『MME研究ノート 21』 pp. 9-10, 1985. 8.
- 40) 寺脇信夫「大学放送教育番組の改善に関する調査研究 ～その一断面～」『MME研究ノート 5』 p. 24, 1984. 1.
- 41) 大塚秀高・阿部美哉「テレビ大学講座改善研究(1)～『知能と創造性』の場合～」『MME研究ノート 1』 pp. 26-45, 1983. 9.

- 42) W. ペリー・西本三十二監訳「オープン ユニヴァーシティー」p.114/p.120, 創元社、1979.1.
- 43) 内田安昭「6タイプによる試作番組の研究」『MME研究ノート 21』pp.31-49, 1985.8.
- 44) 阿部・前掲論文「39)」p.10,
- 45) 内田・前掲論文「43)」p.34,
- 46) 「映像表現の多様性ーシンポジウムの記録ー」『MME研究ノート 6』1984.6.
- 47) 『MME研究ノート 18』pp.7-77, 1985.
- 48) 同上 pp.79-144,
- 49) 寺脇信夫「『動物の行動』に関する視聴・評価・分析」『MME研究ノート 9』pp.21-25, 1984.5.
- 50) 阿部・前掲論文「39)」p.11,
- 51) 島田裕巳「『宗教理論と宗教史』コース・チームの試み」『MME研究ノート 21』pp.76-78, 1985.8.
- 52) 阿部・前掲論文「39)」p.12,
- 53) 「第5回大学放送教育研究シンポジウムの記録 第3セッション『テレビ・ラジオ・印刷教材』」『MME研究ノート 27』pp.109-139, 1986.2.
- 54) 同上 p.134,
- 55) 「放送教材・印刷教材の複合利用ー『文化人類学』をめぐってー」『MME研究ノート 39』1987.2.
- 56) 「第7回大学放送教育研究シンポジウムの記録 第1セッション『学習者主体の教材作りへ接近』」『MME研究ノート 52』pp.5-114, 1988.3.
- 57) 同上 p.45,
- 58) 〃 pp.52-57/pp.98-114,
- 59) 「第7回大学放送教育研究シンポジウムの記録 第3セッション『番組分析と視聴行動研究』」『MME研究ノート 52』pp.172-202, 1988.3.